

平成 22 年度新潟精神医学会

日 時 平成 22 年 10 月 23 日 (土)
午後 1 時～
会 場 ホテルイタリア軒
3 F サンマルコ

I. 一 般 演 題

1 広汎性発達障害の易刺激性に aripiprazole が奏功した 1 例

斎藤 摩美・遠藤 太郎・小野 信
染矢 俊幸

新潟大学大学院医歯学総合研究科
精神医学分野

【はじめに】広汎性発達障害は自閉症を中核とする発達障害の総称で、①社会性の能力の障害、②コミュニケーション能力の障害、③想像性の障害とそれに伴う行動の障害を基本症状とし、幼児期から付随することの多い、感覚過敏、興奮・易刺激性・自傷などの付随症状、基本症状・付随症状への不適切な対応により状況依存的・反応的に生じてきた精神病性症状・気分症状などの二次症状がみられる。広汎性発達障害の基本症状を薬物療法で完治することは不可能であるが、付随症状や二次症状に対してはいくつかの向精神薬の有効性が確認されている。今回、我々は広汎性発達障害の易刺激性に対して aripiprazole が奏功した症例を経験したので報告する。

症例は 20 歳、女性。発語は 2 歳で、3 歳で 2 語文を話した。人見知り、模倣はみられず、集団行動が出来ず、極端に不器用であった。小中学校でも語彙は乏しかった。成績は下位で、不器用さから 5 教科以外も苦手で、特に他人の動作を模倣するような体操やダンスが苦手であった。単位制高校 4 年時に友人作りに失敗し、冬頃から登校を嫌がるようになり、学校で興奮し泣き叫ぶこともあった。高校卒業後、常に母から離れず、自分の思い通りにならないと興奮して暴れることが増えた。また、家族から悪口を言われている内容の幻

聴が出現した。当科を初診し aripiprazole 6 mg を開始され、同月、特定不能の広汎性発達障害の診断で入院した。

入院時には母が帰ろうとしたところ突如興奮し、大声を出して暴れた。視線はほぼ合わず、無表情で、会話は広がらず、いくつかの仕種にやや不自然さを認めた。入院日に aripiprazole を 12mg に増量した。異常行動チェックリスト (Aberrant Behavior Checklist) 日本語版にて症状を評価したところ、入院時-入院 7 日-退院 (入院 37 日) で、易刺激性は 30 点-1 点-0 点、多動は 26 点-3 点-1 点、無気力は 26 点-24 点-17 点と変化した。退院後 5 ヶ月の時点でも症状の明らかな増悪は認めておらず、地域の作業所に通所を開始している。

【考察】広汎性発達障害の付随症状に対しては、主に攻撃性・易刺激性・多動に対していくつかの抗精神病薬が、強迫行為・反復行為に対していくつかのセロトニン再取り込み阻害薬が二重盲検試験により、その有効性を確認されている。Aripiprazole は Owen ら (2009) により、自閉症患者を対象としたプラセボ対照二重盲検試験にて、易刺激性、多動、常同運動、不適切な言語に対し有効であることが報告されており、当患者もその結果に矛盾しなかった。広汎性発達障害は薬物治療で完治する疾患ではないが、易刺激性などの付随症状には薬物療法は有効であり、治療により患者の社会生活能力を向上させうるかもしれない。

2 アリピプラゾール治療により局所脳血流低下及び認知機能の改善を認めた発症危険精神状態の 1 例

林 剛丞・鈴木雄太郎・新藤 雅延
染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院精神科

統合失調症の前駆期は、同疾患への早期介入の重要性が認識されてから注目されているが、特異的な症状及び生物学的指標は明らかになっていない。近年、統合失調症前駆期という retrospec-